

東日本大震災被災地ボランティア 2019年冬 石川花恵さん(中2) 防府教会

私は去年の夏のボランティアで、福島第1原子力発電所の周辺を視察しました。今回は東日本大震災の地震と津波の被害を受けた地域の視察をしました。

その中で特に印象に残っているのは宮城県石巻市立大川小学校の語り部の佐藤さんのお話です。大川小学校のすぐ後ろには、気軽に登れる位の山があります。私も実際に自分の足で登ってみました。傾斜も緩やかでとても簡単に登ることが出来ました。地震発生から津波到達までの51分間で、この山に登れば、助かることができたはずなのでは…。児童74人と教職員10人が死亡・行方不明(児童4名)という事態に陥ったのはなぜなのか？ 今でもはっきりとした事実は分かりません。佐藤さんは「命を救うのは山ではなく、山に登る判断と行動」と仰っていました。私は確かにその通りだと感じました。これから30年以内に70%~80%の確率で南海トラフ地震が来るといわれています。同じことを繰り返さないために、判断力と行動力を培うことがとても大切なことだと感じました。

さらに佐藤さんは「ひとつの面からではなく、多方面から物事を捉えることも大切」と仰っていました。私は大川小学校の事実を聞いた時、まず「先生方は何をしていたのだろう」と考えました。しかし、このお話を聞いてからは「先生方も逃げられなかった理由があったのかも？」と考えられました。私は物事をひとつの面から考えがちなので、多方面から考える事は生活にも役立つ、とても大切な事だと思いました。語り部をしていると「何でこんなところさびしい所に学校があるのですか？」と言われることがあるそうです。悲劇の舞台、悲惨な場所だと考えてしまう人が多いと思います。でもここにはたくさんの人々の暮らしがあった。かけがえのない、何よりも大切な命があった。子どもたちが遊んでいた、普通の日常がそこにはあったんです。

旧大川小学校を訪問する前日、私は、福島市内の学童保育のお手伝いをしました。中には原発事故で被害を受けた子どもたちとどういふ風に接すればいいかと考えていました。しかし、そんな心配をする必要は全然ありませんでした。みんなとても良い笑顔で、子どもたちの過去を心配していたことを忘れるほど楽しい時間が過ごせました。

実は、今回の滞在は、夏に行ったときのカリタス南相馬が使用できず、伊達郡国見町の氏家さんという信者さんのご自宅にホームステイになりました。個人の自宅でありながら、年末に大人を5人、しかも五泊も受け入れてくださいました。氏家さん自身「最初はありえないと思った」と言われました。でも、朝と夜のおいしい食事をたっぷりご用意くださいました。私がちよっと体調を崩した時にも「福島のお母さんだと思ってね」と、本当に優しく接してくださいました。「多大な負担や迷惑をかけているのでは」と心配しましたが、それよりも「とってもおいしいです」「ありがとう」と何度も口にしました。

私にとって被災地支援とは、上の立場から何かをしてあげるのではなく、空間と時間を共にして「出会えてよかったね。一緒に過ごすのは楽しいね」と笑い合うことでした。被災地ボランティアで学んだこのことを、普段の生活でも生かして、いつか自分の周りにいる人たちの孤独に寄り添えるようにになりたいです。

竹添朔次郎さん(中2)防府教会

今回、東北ボランティアに参加させていただいて、実際に現場を見て自分がどれだけ無知だったか、知っている気になっていたかを思い知らされました。もちろん、悲惨な状況というのは、聞いたり見たりしてある程度は知っていました。けど、8年も経ってるからふつーになおってきているだろうと思っていました。しかし、行ってみるとそんなことはありませんでした。被害にあった地域はガレキなどは撤去されたもののほとんど建物がなく昔の写真などと見比べてみてもけっして、元通りにはなっていないことがわかりました。実際に行ってみたらわかったのですが、離れている地域では8年も経ったいまでも復興には程遠い状態でした。実際に行ったり調べたりしてないと基本的には被害の現状がわからないのが問題だと思いました。なので、実際に行き見たからこそ、遠く離れた山口の地で、東日本大震災の被害は終わっていないということ、みんなの記憶から忘れられることがないようできる事をしっかりとしていこうと思いました。

宮内優吾さん 萩光塩学園 高2

今回は初めてのボランティア参加でとても不安でしたが竹添くんや石川さんと一緒に活動することでとてもよかったと思います。2019年10月に起きた台風19号で被害を受けた丸森町を今回視察して、自分が想像していたよりも被害地域が広く正直驚きました。言葉にできないくらいでした。6年前、同じ水害の経験をした自分は「自然の力は怖いな

と改めて感じました。今回起きた台風で亡くなられた方がいっらっしゃいます。どうしたら被害者をなくすことができるのかとても考えられました。

翌日は、8年前東日本大震災で被災した宮城県内の震災遺構・荒浜小学校の中を視察しました。2011年3月11日ニュースで見っていたこと、とても大変なことがこの学校の中で起きていたんだと肌で感じました。車などいろんなものが学校に流されて、当時学校にいた児童さんはとても怖かっただろうなと思いました。石巻市の大川小学校の訪問では津波の破壊力がこんなにあったんだと見て感じました。佐藤さんのお話を聞いてとても胸に刺さりました。佐藤さんも津波で娘さんを亡くされて話すことはとても辛いはずなのに体験したこと話されました。それはとても勇気がいることだと思います。大川小学校のグラウンドにある壁に「未来を拓く

と書いてありました。学校の校歌にもこの言葉がありました。今回、大川小学校に行ってもう一度命の大切さを確かめていきたいと思いました。

2019年冬季ボランティア福島「宮城・岩手県震災遺構視察」 山口教会 瀬川憲昭

2019年最後のボランティアは山口、萩、防府、徳山から司祭、引率者(自分)を含め5名の参加を得て、実施されました。ただ、今回はこれまでのボランティアに比べると、言わば異例づくしでした。まず、①肝心な寝食をするベースが年末閉鎖された事 ②計画段階にネットで調べていたことと、現地の状況に食い違いがあり台風19号の被災地ボランティアが出来なくなったことが挙げられます。

- 1 については福島県伊達郡国見町の信者さん(氏家さん)が全日程の全員分の宿泊を快く引き受けて下さいました。本当に感謝の一語に尽きました。結果的には、1日を除いて4日間の食事も氏家さん宅で賄って頂き、この受け入れがなければ、今回の実施は無かったかと思います。
- 2 について当初、この度の台風19号の水害で被害を受けた丸森町でのボランティアをする予定を組みました。町のボラセンのネットで実施日時が年末まで行う旨の記載がありました。出発直前に確認の為再度ネットで見ると、12月26日で今年度の活動は終了の旨の記載がありました。けれども、27日の夕方、視察で現地を訪れるとボランティアをしてる人を見かけました。情報が混乱していて結局作業はできませんでした。逆にこの事で計画を変更したので、今迄訪問したことの無い被災地をこの目で確認できたことは、大きな収穫でした。

さて、今回のボランティアの最初の2日間(12月26日・27日)は学童保育・星の子サークルでの手伝いでした。冬休みの宿題帳や、こちらから送った、恐竜・動物の貯金箱、恐竜クラフトの制作、恐竜バルーン2体によるデモンストレーション等を行いました。この時の、こどもたちは恐怖心と興味が入り混じって、色々な表情を見ることができました。

重複になりますが、学童保育の2日目の午後は、台風19号により河川決壊の大きな被害を受けた丸森町を訪問しました。年末のボランティア作業はこの日で終了していましたが、あちこちに被害の様相は見取れました。大きく挟られた河川の兩岸、その護岸の土砂に挟まれてメチャクチャにつぶされた軽トラが印象的でした。また、町役場前の被災廃棄物の集積所も山盛りで年明け作業が、思いやられる状態でした。

12月28日と29日は、宮城、岩手の震災遺構を訪問しました。中でも特に印象に残ったのは、学校の先

生の判断一つで生死の分かれ目を生じた2つの小学校の訪問でした。一つは仙台市の海から700m離れた荒浜小学校です。4階建ての校舎に、生徒・先生・近隣住民320人が避難しました。2階部分まで津波が押し寄せましたが、校長の的確な判断と避難者の協力によって27時間耐えて全員助かりました。

一方は石巻市の大川小学校です。校舎校門のすぐ200m位先には北上川があり、河口からは3.9kmに位置しています。地震発生から津波の到達迄51分も避難せずに留まっていました。裏手には校庭から150m先に小高い山もあり、逃げようと思えば子供の足でも、数分と掛からない距離です。話を聞くと、校庭で動かずに待機して移動し始めたのは津波が来る1分前、約150mを移動、しかも山側でなく何故か川に向かったために、児童74名(死亡70名、行方不明4名)教職員10名が津波の犠牲になりました。本当に信じられない行動に思えます。

二つの小学校の周辺の環境・建物の構造と規模・生徒数等々違いはあるものの、やはり当時その現場に居られた教職員の咄嗟の判断に違いがあったように感じました。訪問した際に、現場で「語り部」として当時の状況を説明下さっていた佐藤さんも、この学校に通っておられた娘のみずほさんをこの津波で亡くされておられました。自分の娘を失った小学校の現場で、訪れる人々に思い出したくもないであろう状況を、どんな思いで日々、話されているかと思うと、本当に胸が裂ける思いである。多くの命が奪われた原因を知りたい、突き止めたいという一心だと思います。強い信念をもって後々まで語り継ぎ、検証しながら今後も様々な活動されると思います。今回の2つの学校の訪問で先述の通り、現場にいた校長、或いは教師の判断、指示一つで生死の明暗が分かれる事例を垣間見ました。

最終日は、陸前高田の震災遺構を見学しました。約7万本あった高田松原の中で津波のあと唯一残った「奇跡の一本松」、そのすぐ横にあった「ユースホステル」の遺構、少し離れた場所にあった「道の駅」の遺構等を見学しました。それらの遺構と新しい「道の駅」を含むかたちで広大な高田松原津波復興祈念公園が作られていました。この建物をよく見ると配置が広島市の平和記念公園とよく似ている感じがしました。建物の中心から海に向かって、まっすぐな道が走って階段を上った箇所が展望台を兼ねた高台になっています。多くの命が奪われた箇所に向かって真っ直ぐに道が伸びているところが重なる感じました。私は災害直後から、陸前高田に行きたい気持ちがあり、九年近く経ちやっと希望が叶いました。前述の高台の展望台から街の方を見ると、結構距離もあります。街の奥は今土が盛られて高台となっていますが、周辺一帯が津波にさらわれています。相当な面積です。その祈念公園から逆に海の方を見ると、高い防潮堤で300m先の海の景色は全く見えません。被災後、張り巡らされたベルトコンベアーによって運ばれた土砂で盛り土されたと聞きます。勿論、ダンプも動いたでしょうが、それでは間に合わない程の膨大な土砂が必要とされたのでしょう。これほど大掛かりに機械を設置しなければならない程、広範囲に市の中心部が被害に遭っていた証です。岩手県の大槌町でも、これほど広くはなかったと思います。

今回の各所の訪問で、道路・建物は震災前の状態まで戻っているような感じは受けました。ただ、海岸に近いところは、防潮堤が新設されたり、嵩上(かさあげ)されて、近くからでは海の様子は殆ど見えません。いざという時の避難路、避難先の確認を常日頃からすることが大切だと思いました。

地球の温暖化による気候変動によって、将来あらゆる自然災害が、いつ・どこで起こっても不思議でない時期になっています。自然災害から被害を最小限に抑えるために、常に自分自身で考え、行動できる準備を怠らないようにしようと感じました。

最後にもう一度、この度のボランティア実施に当たって、私たち5人を家族の様に快く受け入れて、食べる事、寝る事全てに全力を注いで支援して下さいました氏家さんに感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。神に感謝！そして氏家さんに感謝！

2019年冬季ボランティア体験記 徳山教会 柴田 潔 神父

事前の準備と反省

今回は年末でカリタス南相馬ベースが使用できないということで、以前にお世話になった氏家さんに再度お願いすることになりました。受け入れ人数と日数で大変な労力をおかけしてしまいました。このようなご無理を聞いてくださる方に巡り会えたのも震災を通していただいた神様の恵みと感謝しています。また、屋外ボランティアができないため思い切って視察に2日間を当てることにしましたが、そのルート決定に当たって仙台教区サポートセンターの濱山さんに大変お世話になりました。何度も質問させていただき、その都度丁寧なアドバイスを下さいました。宿泊先に加え、大川小学校の語り部の紹介をくださったおかげで訪問が実現しました。私にとって本当に貴重な体験になりました。星の子サークルの学童保育については、以前にもお手伝いしたことがあり準備しましたが、私一人でしてしまったところがあります。今後は、事前学習を含めて活動の用意をみんなですて参加できるように心がけようと思います。

2学期の学期末、降誕祭のミサが終わってすぐの出発で正直ゆとりがありませんでした。氏家さんのお宅に着いて、ホームステイなのでリラックスして若者たちは年末のテレビを見ていましたが、カリタスベースで宿泊するときのように、震災学習の映画などを見た方が良かったようにも思いました。出発前に、参加者にどう準備して、現地でどのように過ごすように導いたらいいかは、今後の課題です。

星の子サークルでの学童保育

2017年の春休み以来の訪問でした。知っているお友達が、成長してたくましくなっているのを見て嬉しくなりました。女の子も一生懸命に恐竜クラフトに挑戦していたし、小学2年生がお友達二人と完成させる姿を見て感動しました。飽きずに熱心に取り組んでいる様子を見て、これで良かった、と安心しました。また、ティラノサウルスとトリケラトプスの共演、福島に出発する朝、早起きして作って手作り恐竜チョコも喜んでもらえて嬉しかったです。中高生たちもクイズをしたりゲームをしたりで喜んでもらえてました。

視察

丸森町

学童保育2日目の午後は、台風19号で被害を受けた丸森町を視察しました。実際軽自動車が土砂で埋まっていたり、がけ崩れで家が倒壊しているお宅を見ると心が痛みます。中には、川と崖に挟まれて被災しているお宅もあり、どれだけ心配だったか想像すると言葉がありません。屋外活動ができれば、若い参加者にとっても良かったのですが、正確な情報がネットでは調べられず、見て回るだけになかったのは残念です。小さき花幼稚園の夏祭りの義援金を丸森町役場に直接届けることができました。暑い中、頑張ってくださいました役員さんのお気持ちを届けられました。

陸前高田市

陸前高田市は、2012年の3月に仙台から大船渡に向かう夜の車中に通過したことがあります。本当に何の光もなく、全て流されていたことを感じさせました。あれから、8年近く経ってからの訪問ですが、あの広大な祈念公園が意味する、津波の範囲の広さ。いくら造成にお金をかけても、人がもう住めない範囲の広さをまざまざと感じました。

旧大川小学校

私にとっての冬のボランティアの大きな目的は、石巻市の大川小学校の訪問でした。2011年からおそらく30回以上東北を訪れていますが、大川小学校に足を運ぶ機会がありませんでした。そのために日程を組むんだったら、ボランティア活動を優先させてきましたが、今回は屋外ボランティア活動ができないということで訪問が実現しました。2019年の3月、山口県光市に講演に来られた際に佐藤敏郎さんからお話を伺ってはいましたが、現地での語りは別の次元でした。「どうしてあの時、先生たちは避難させなかったのか?」「子どもを失った親御さんはどんなお気持ちなのか?」それを考えるだけで、心が締め付けられます。現在、2つの幼稚園の園長をしている者として、このような悲劇は絶対に起こしてはいけない、という気持ちに改めてなりました。「小さな命の意味」を私も考え続けます。体験記の補足に大川小学校について、当日

のお話と3月の講演内容を併記してあります。読まれる方にも、命の大切さを感じていただきたいです。

最後になりますが、ボランティアの期間が主日を挟むことで徳山教会は集会祭儀となりました。しっかりと集会祭儀を執り行ってくださった、広野幸仁さん坂本和枝さん、応援してくださった皆さんに感謝いたします。

補足

以下は大川小学校に関する内容です。長くなりますが、命の大切さを学べると思い体験記に加えました。

2019年12月28日 宮城県石巻市立大川小学校で佐藤俊郎さんからお話を伺いました。（「小さな命の意味を考える」第2集からも記述しています。また一部表現を変えたり加筆しています）大川小学校は、全長567メートルの北上川を渡す新北上大橋から土手を挟んで200メートルしか離れていないところにあります。

「随分寂しい場所に学校があるんですね」現地でよくそう言われます。周りに何も建物がなくて、石ころだらけの空き地に、ポツンと壊れた校舎があるだけ。「どうして何もないところに学校があるの？」と思う人もいます。でも、ここには、あの日まで周りに家もあって、子どもたちの笑顔が輝いてたんです。耳を澄ませば、子どもたちの元気な声が聞こえてきます。校庭で走り回って、一輪車で遊んで、お花見をしながら給食を食べてたんです。みんな大好きな大川小学校。私の娘、みずほ(あと一週間で卒業だった)も笑顔で通っていました。

2011年3月11日、東日本大震災の津波で大川小学校では全校108人中、74名の児童が死亡・行方不明(4名)となりました。今でも親は行方不明の子どもを土日・重機で探しています。教員も10名が亡くなっています。校庭にいた児童のうち、4名だけが奇跡的に助かりました。学校が管理していて、このような犠牲を出したのは大川小学校以外にありません。震度6の強い揺れが3分続いた後、大津波警報が発令されました。防災ラジオ、無線、市の広報車が盛んに避難を呼びかけました。校庭にいた子供たちもそれを聞いています。体育館裏の山は、緩やかな傾斜です。椎茸の栽培の学習もしていました。迎えに来た保護者も「ラジオで津波が来ると言ってる。あの山に逃げて！」と進言していました。スクールバスも避難のために待機していました。「山に逃げっぺ」と訴える子もいました。逃げたあと、先生に校庭まで連れ戻された子もいました。・・・避難情報もあり、地震から津波が来るまで51分も時間がありました。手段(山まで逃げる)もあったのに救えなかった。「ここにいてはダメ！ 逃げろ！」と強く言う先生がいませんでした。

時々「命って小さいですか？」と質問を受けます。命は、地球がちょっと身震いしただけで簡単になくなる小さなものです。でも、命の意味を考えるとどんなにも大きくて深い。これほど大切なものはない、と思い知らされています。

大人になった愛娘に逢いたい、抱きしめたい。「行ってきます」の声は聞いたけど「ただいま」の声は聞いていない。会えたけど無言の娘。無言のままで成人式を迎えることになる。・・・

震災当日、翌日・・・我が子を探す作業は地獄でした。土砂の中から足が、手が、頭が……。顔についた泥を取ってあげて、泣きながら我が子を抱きしめました。30数人の子どもたちが並べられました。みんな娘

と仲良しだったお友だちです。親子で、友達同士で楽しく過ごした時間もあつたのに・・・こんなことになって。どうして？ 疑問と怒りは消えません。

辛く、厳しく、悲しい思いは薄れることはありません。心に突き刺さったまま年月は過ぎます。一生付き合っていかなければいけないと覚悟を決めています。それが、娘の親であり続けることだと感じています。

ボロボロになった大川小学校の校舎。震災遺構として遺すことになりました。これからの学校防災・防災教育のために学びに来ていただきたいですし、利用していただきたいです。でも、震災遺構は永遠には保存できません。いつかは崩れます。崩れても心の中にある大川小学校は永遠に崩れることはありません。娘と親の関係も永遠に続きます。命の大切さは、受け継がれなければいけません。

東日本大震災で、現代社会は宿題を突きつけられました。学校だけでなく、私たちの周りにある様々な概念、価値観、システムを見直す時でしょう。その宿題は、情報や物が氾濫する反面、多忙になって閉塞感が蔓延し、本質的な豊かさが失われていることです。日本の方向性にも影響を与えています。教育委員会は大人の利害とかメンツじゃなくて子どもたちの命を真ん中に置いて欲しい。誠意をもって向き合えば、はじめはかみ合わなくても必ず方向性は見えてくると私は信じています。

大川小学校の校歌には「未来を拓く」というタイトルがつけられています。大川小の悲劇は、命の大切さを再認識する始まりの場所です。亡くなった小さな命が「未来」のための大切な意味を持たせた時、あの子たちがニコニコ笑って出迎えてくれる気がします。その「未来」に向けて辛い体験を語り続けています。

2019年3月10日の佐藤敏郎さんの防災教育の講演(光市島田コミュニティセンター)

石巻市の大川小学校で小6の娘さんを亡くされた佐藤敏郎(中学の国語の先生)さんの体験

「目の前にいる子どもたちが、かけがえのない、いのち 一つしかない命をもっていて学校は安全で安心なところって言う前提がある。少なくとも日本の学校はそうなんですよね。学校にいるから安心だって、私をはじめ、みんなそう思ってた。・・・それは、間違いじゃなかったというようにしたい。」
NHKスペシャル 3.11 あの日から2年 2013年3月8日放送 「わが子へ 大川小学校 遺族たちの2年」

学校にいた78人中74名が津波の犠牲になり、先生たち11名も亡くなった。

11人の先生は何をしていたか？ サボってたわけじゃない。

ゆっくり歩いても間に合ったのに、ずっと校庭にとどまった。動き出したのは津波が来る1分前。

1分でも、山の方に逃げたら助かったのに、津波の方に進んでいった。

想像してみてください。この1分間を。「津波が来るぞ！」60数センチの狭いフェンスの間を全員すり抜けたと思ったら8メートルの津波が来た。先生たちどうしたと思いますか？

抱きしめるしかない。先生たちは抱きしめて、覆いかぶさって、津波に流された。

子供を救いたくない先生はいない。親の気持ちで言ったら「救って欲しかった命」

先生にとっては「救いたかった命」であるのは間違いない。「救えたでしょう？」というのも事実。

全部同じ命。「救いたかった命」「救って欲しかった命」「救えたでしょう？という命」「救えなかった命」4つのど真ん中に私がいる。

先生たちは「仕方がなかった」とは思っていない。「悔しかったはず」

先生たちも守りたかった・・・しかし津波を前にして子供を抱きしめても守れない。
その後悔にしっかり向き合いたい。

山に逃げた子は、「戻れ！」と連れ戻された。

「先生早く逃げろ！」と言った子は「黙ってる！」と言われた。

あの瞬間の子どもたちの表情はどうだったろう？ うちの娘はどんな顔だったのか？

子どもたちは、冷たくて怖くて・・・津波にのまれて数秒後に死んでいった。

救う条件は全て揃っていた。防災の研修会、時間、情報、手段・・・

険しい山を登って助かった学校、いくらでもあります。

大川小は、そう言った学校に比べたら救う条件は揃っていた。

でも、組織としての意思決定ができなかった。

行ってはいけない方に、行ってしまった。

調べれば調べるほど、逃げたがっていた先生が多い。

チームとしての意思決定にならなかった。

大川小に来られた方は「ここ(避難したら助かった山)は、簡単に登れるね」とみんな言う。

山はそれ自体、命を救ってくれない。登らないと救われない。

命を救うのは、山ではなく、人間の判断と行動。

訓練やマニュアルもそう。不要なわけではない。

あの場面では、本質ではない。「ここにいてはダメだ！ 逃げろ！」と言う発言と判断が必要だった。それが言えた学校はみんな助かってる。

パニックになると正しい判断はできなくなる。備えるべき備えをしておけばよかった。

マニュアルには「津波が来たらこうする」と明文化されている。

地震・津波が来る確率が高いから毎年のように、見直しを迫られていた。

全部の学校に津波のマニュアルはある。

大川小学校もマニュアルはあった。「近くの空き地か公園に逃げる」 実際には、空き地も公園もない。実体のないマニュアルだったことを校長以下誰も知らない。

毎年更新されてきた。何故こうなってしまったのか？

マニュアル担当の先生は「津波が来ると思ってなかった。一般的な災害として受け止めていた。だから、文言を入れただけ」 市教員は「マニュアル作れ、作れ」と通達を出した。

その時に山梨県の参考例を添付した。だから、このマニュアルは何のために作ったのだろう？

子どもの命を守るためではなく、提出のためのマニュアル。

想定内なら、マニュアルも訓練も必要ない。

想定外で通用するか？ 想定外に対応して行動するのは実はそんなに難しいことではない。

「念のため」と言うこと。津波である時、助かった人はみんな「念のため」に行動している。

目の前に時速 60～80 キロの津波が来たら間に合わない。まだ津波は遠いけれども、見えないけれども「念のために」行動した人はみんな助かっている。

「念のため」には「ギア」がある。365 日、24 時間、津波を警戒し続けることはできない。

「ギア」を入れる。学校の「ギア」の入れ方は、一般の方よりも「早く」「高く」入れないといけない。

それはみなさん知っています。では、どうやって「ギア」を入れるか？「高く」入れられるか？学校の先生は、そんな話を聞くと「わあ、これから忙しくなるな」と言う人がいます。「また、通達が来る」「分厚いマニュアル整備しろとか言われる」「報告しないといけない」「会議が長くなる」・・・こう言う提出物を作るのはやめる。むしろ、大川小学校から学んだことは「提出物ではない」と言うこと。

「あそこには笑顔で通った学校があった」と言うこと。それが一瞬にしてなくなったことにしっかり向き合ったらいい。あそこは、子どもたちが遊んでいた場所、先生たちもいろんな活動を一緒にした場所・・・それをしっかり見つめる、それが一瞬にしてなくなった。それに向き合えば、勝手に「ギアは上がる」命を輝かせればいい。子どもたちにキラキラさせる。そうすれば、「絶対に守りたい！」と言う気持ちになる。子どもたち自身も「輝く命だからここで死んではダメだ！」と思うはず。

私が教員として一番変わったのは「子どもへのまなざし」「命をどう見るか？」です。「かけがえのない命」と何度も言ってきましたけど、震災後は命が大切だなんてものではなくて、頭から足の爪先まで「命」それまでそう思ってなかった。生徒だと思っていた。私のクラスの生徒。座ってて当たり前、国語の教科書出してる生徒、この子は国語が苦手な生徒、親が給食費を滞納している生徒、・・・と思ってました。でもその前に「命」「命」がかばんを背負ってくる。「命」が教科書開いてる。そう思うようになりました。やはり、あれだけのことがあると、被災地の学校なのでみんな避難所から「よく学校来てるな！」と思う。ロクな生活ではないのに「よく頑張ってる」・・・「学校に来てる」と言うことは、子どもたちに服を着せてご飯食べさせて「行ってらっしゃい」と言う人がいると言うこと。それが「命」と言うことだと思います。一個しかない命、それを育ててくれる人がいる。「行ってらっしゃい」「ただいま」・・・命のやり取りの大切さ。

「小さな命の意味を考える会」を2013年に作りました。いろんな方と大川小のことを考えたい。「命は小さいですか？」もちろん「小さい」あんなに簡単に、地球がちょっと震えただけで2万人も一瞬で死んでしまう。そんな弱いものはない。しかも一個しかない。でも、意味を考えると、「こんなに深くて重いものは他にない」

災害時にモノを言うのは、普段の人との付き合いです。行方不明者を探しているときに「あの人聞けばわかる」という人づてが役に立ちました。

小さなお子さんが何人かいるお母さんは、全員を連れて逃げることはできないかもしれません。そんな時に、仲のいいご近所さんに預けることもできます。見ず知らずの人にいきなり子どもの命を預けるのは難しいものです。日頃が大事です。

あの日大事だったことは、いつも大事なこと。それが凝縮して出る。急に大事になるわけではない。命、判断、備え、習慣、人との信頼・・・みんななくなってから急に思い出しても・・・できること日頃からやるしかない。その場になってできないことを目指しても・・・たとえ頑張ってもすぐに疲弊してしまう。

「念のため」

教育はどのような「未来」を作るか？ 東日本大震災は辛いだけの過去ではない。「未来」のための「過去」

南海トラフ地震の予測。とんでもない地震が来る・・・

30数万人が亡くなる予測。私たち教員はどのような「未来」を作るか？

津波・地震が来る「未来」は変えられない。でも30数万人が亡くなるという「未来」は変えられる。どうやって？ 今、考えて、行動していくことで変えられる。

宮城県の反省は「巨大地震と津波が来るよ」と聞いていたのに、「行動したくなかった」家が流される、悲しむ人がいっぱい出てくる・・・そういう「未来」を想像したくなかった。だから「大丈夫じゃないか？」「大したことないんじゃないか？」と油断した、言い聞かせた。違いますよね。 私たちが想像しなければならない「未来」はものすごい津波が来ることを想像して、みんなが亡くなって悲しむのを想像するのではなく、みんなが「念のため」に避難して丘の上で再会して「良かったね」と抱き合う「未来」を想像すること。その「未来」を作るのは「教育」。脅しではなく、ハッピーエンドの「教育」そのためには現実を知って、「念のため」を深めていく。(涙を抑えながら、みずほちゃんに、お父さんは伝えたよ) 私たちの体験を使ってください。

大川小学校に関わる動画の紹介

1 大川小学校の悲劇 17:19 2016年

https://search.yahoo.co.jp/video/search?p=大川小学校の悲劇&fr=top_ga1_sa&ei=UTF-8

②東日本大震災シリーズ 42 小さな命の意味 震災5年・大川小学校 6:30
2016年

https://search.yahoo.co.jp/video/search;_ylt=A2RCAwP2RhxeinEAaDqHrPN7?p=東日本大震災シリーズ42%E3%80%80小さな命の意味&aq=-1&oq=&ei=UTF-8

③大川小学校 なぜここへ来なかったのか？ 2:21

https://search.yahoo.co.jp/video/search;_ylt=A2RCA9eDRRxelFMAakSHrPN7?p=大川小学校%E3%80%80なぜここへ来なかったのか？&aq=-1&oq=&ei=UTF-8

4 東日本大震災シリーズ21 大川小学校の今 6:53 2014年

<https://www.youtube.com/watch?v=rkKpn4LOw70>

5 震災から6年9ヶ月 生き残った青年“あの日”を語る 只野哲也さん 4:00

<https://www.youtube.com/watch?v=aTiBFDPwYPk>